イエメン・ラスール朝とウラマー名家

The Rasūlids and the 'Ulamā' Families

栗山保之*

KURIYAMA Yasuyuki

ABSTRACT Yemen is situated in the southwestern corner of the Arabian Peninsula. In 626/1228 the Sunni dynasty of Rasūlids (626-858/1228-1454) conquered Lower Yemen, and thereafter they were constantly pitted against the Zaydī Imāmate that ruled over Upper Yemen. The Rasūlids built many *madrasa* in Zabīd, the largest city in the Tihāma, for the purpose of training and protecting the Sunni 'ulamā'. This measure was taken in order to assert the legitimacy of their rule over Yemen and prevent the advance of the Zaydī Imāmate. Under the Rasūlids there existed several distinguished families who produced a succession of 'ulamā'. These families included the Banū 'Ujayl, Banū al-Manbaḥ, and another was the Banū al-'Imrān, who are taken up for consideration in the present article.

In the 6th/12th century the Banū al-'Imrān, who had living in the Tihāma, migrated to the village of Maṣna'a near the city of al-Janad in the southern highlands of Lower Yemen. Because the Banū al-'Imrān had already produced several renowned 'ulamā', the 'ulamā' of this region began coming to study under members of the family. During the reign of the Rasūlids sultan al-Muẓaffar Yūsuf b. 'Umar, a member of the Banū al-'Imrān by the name of al-Qāḍī Muḥammad b. As'ad b. Muḥammad b. Mūsā b. al-Ḥusayn b. As'ad al-'Imrānī formed a close friendship with the sultan. Consequently, with the backing of the sultan's authority, the family came to have enormous influence, especially in the administration of justice, and they began to appoint as *qāḍī* those 'ulamā' who had connections with the family. This led to confusion and corruption in the administration of justice. But after the death of the sultan al-Muẓaffar and the installation of a new sultan, the Banū al-'Imrān were deprived of their power.

* 日本学術振興会特別研究員
JSPS Research Fellow

はじめに

イエメンは紅海とインド洋との合流点に位置しているため、古くから海上交易の重要拠点として知られていた。とりわけイエメンを支配したラスール朝 Rasulids [626-858/1228-1454年] の東西交渉における歴史的役割については、すでに家島彦一氏によって様々な成果があげられている⁽¹⁾。しかし、このような視点以外のラスール朝研究では、G. R. Smith や D. M. Varisco によって、ラスール朝初期の政治的動向に関する編年の通観がおこなわれた程度であり、必ずしも十分であるとはいえない⁽²⁾。

いまだ検討すべき多くの課題を持つと思われるラスール朝研究に関して、筆者は特にラスール朝とウラマーとの関係のあり方に関心を持っている。イエメン北部のザイド派イマーム勢力と常に対峙し、かつスナ派征服王朝であったラスール朝のウラマーに対する処遇は、同王朝の特質を考える上で重要な問題であると考えからである。筆者は先にこの問題について、征服王朝のラスール朝が、その支配の正当性を主張するため、紅海沿岸の都市ザビード Zabid に宗教・学術施設を集中的に建設し、多くのウラマーを養成していたことを述べ⁽³⁾た。そこで本稿ではこれを受けて、ラスール朝時代の在地のウラマー名家がラスール朝と如何なるかわりをもっていたのか具体的に述べてみたい。

I

中世イエメン関連諸史料から、ウラマーの相関関係をその血縁関係に基づいて整理すると、ラスール朝時代のイエメンで数世代にわたって継続的にウラマーを輩出した家系が浮かび上がってくる。それらは、ウジャイル家 Banū al-‘Ujayl, シャマーフ家 Banū al-Shamākh, アスバフ家 Banū al-Aṣḥab, マンバフ家 Banū al-Manbaḥ などである。そして本稿で考察するイムラーン家 Banū al-‘Imrān もまたそのひとつであった。

イエメンの歴史家によれば、イムラーン家は、‘Imrān b. Rabī‘a b. ‘Abs b. Zahara b. Ghārīb b. ‘Abd Allāh b. ‘Akk b. ‘Adnān に始まるという。残念ながらこの人物の詳細は不明だが、その名前から紅海沿岸部のティハーマ Tihāma を拠点としていた ‘Akk 系部族の出身であることが確認できる⁽⁴⁾。

ヒジュラ暦 6/西暦12世紀になると、イムラーン家はマスナア Maṣṣana’a に移住した。中世イエメンの著名な歴史家ジャナディー al-Janādī [d. 732/1331年]

は Ibn Sumra の言を引用し、次のように記している。

私はその地方の最も偉大であり学生たちのために有益な地を見た。それは
マスナア Maṣna'a である。そこは Ṣabhān の掌中にあった。そしてイム
ラーン家は彼等からその地を購入し、そこに住居を建設した。これは556年
のことであった。⁽⁵⁾

マスナアは南部高原・山岳地域のジャナド al-Janad 北東にある。4/10世紀の南
アラビアの地理学者ハムダーニー al-Hamdānī は、その地誌 *Ṣifat Jazīrat al-*
ʿArab で、このマスナアに言及していないので、マスナアはイムラーン家が新し
く開発ないし規模を拡大した村落であったと思われる。いずれにしろイムラー
ン家に土地購入を可能にするだけの財力がすでにあったことは確かであろう。

またマスナアは「その（イムラーン家の）住居の建設開始以来、学生たち
（*ṭalaba*）の聖域（*muʿīl*）でありつづけた。また山岳地域の教師や法学者や研
究者たちにはそこで学んだ多くの者たち以外にいなかった」⁽⁶⁾とあるように、多
くのウラマーが修学のためマスナアに集まっていた。ラースール朝時代のザビー
ドにはイエメン内外よりウラマーが次々と訪れていたが、その一方で、マスナ
アのようなウラマー名家が居住する山間地域にもウラマーは集まっていた。⁽⁷⁾
ウラマーの修学機会は、都市以外に、ウラマー名家の居住地である都市周辺地域
にもあり得たことが分かる。⁽⁸⁾

マスナア購入直後のイムラーン家を代表するウラマーは、シャーフィイー派
のヤフヤー Yahyā b. Abū al-Khayr b. Sālim al-ʿImrānī [489-558/1095-
1167年] ⁽⁹⁾〔①〕であった。イムラーン家には他にこのヤフヤーと同世代のウラ
マーがいた。ウスマーン ʿUthmān [499-577/1105-1181年] ⁽¹⁰⁾〔②〕とムハンマド
Muḥammad [499-568/1105-1172年] ⁽¹¹⁾〔③〕である。ヤフヤーを含め彼等がカー
ディー等の公職に就いた記録はない。

ヤフヤーの息子ターヒル Ṭahir [518-576/1124-1180年] ⁽¹²⁾〔④〕はメッカに7年
間居留した後、566/1170年にイエメンに戻った。当時、下イエメンを領有して
いたマフディー朝 Mahdids [554-569/1159-1173年] の ʿAlī al-Nabī b. ʿAlī b.
Mahdī [554-569/1159-1173年] は、彼をイエメン南部高原・山岳地域有数の都
市ジブラ Jibla やイッブ Ibb のカーディーに任じた。569/1173年アイユーブ朝

のイエメン侵攻によって、マフディー朝や、アデン 'Adan を領有していたズライ朝 Zuray'ids [473-569/1080-1173年] などの地方政権は次々と滅ぼされた。⁽¹³⁾ サラディンの兄トゥーラーンシャー Sayf al-Islām al-Mu'azzam Tūrānshāh b. Ayyūb [在位569-571/1173-1175年] がイエメンのアイユーブ朝初代スルタンに就任すると、ターヒルはカーディーを罷免されたが、後に復職して576/1180年に死亡するまでこの職をつとめた。ターヒルの息子ムハンマド Muḥammad [546-ca. 600/1150-ca. 1203年] ⁽¹⁴⁾ [⑤] はアデンのカーディーであったことのみ伝わるが、それはおそらく父ターヒルの影響による。

イムラーン家の中でラスール朝時代に最も栄えたのはムハンマド [③] の系統であった。彼にはアフマド Aḥmad [534- ? /1139- ? 年] [⑥], アスアド As'ad [生没年不明] [⑦], ハッサーン Ḥassān [521-597/1127-1191年] [⑧] の3人の息子がいた。アフマドに関してはジャナドのカーディーをつとめていたことしか伝わっていない。⁽¹⁵⁾ その息子アブー・バクル Abū Bakr [616- ? /1219- ? 年] ⁽¹⁶⁾ [⑨] はイエメンにおけるアイユーブ朝最後のスルタン＝マスウード al-Malik al-Mas'ūd Ṣalāh al-Dīn Yūsuf b. al-Malik al-Kāmil [在位612-626/1215-1228年] によってカーディー職に任命された。その後、アイユーブ朝勢力がエジプトに撤退してラスール朝が成立すると、初代スルタン＝マンスール al-Manṣūr 'Umar [在位628-647/1231-1249年] はアブー・バクルを大カーディーに任命した。彼はイムラーン家において初めて大カーディーに任命された人物であった。アブー・バクルの息子ムハンマド Muḥammad [生没年不明] ⁽¹⁷⁾ [⑩] は父の後を継いでマンスールの治世に大カーディー職をつとめることとなった。しかしムハンマドはいまだ若年だったので、マンスールはアスアド ⁽¹⁸⁾ [⑦] にその代理を命じた。その後、ムハンマドはアスアドから大カーディー職を譲られている。ハッサーン Ḥassān [⑧] はジャナドのカーディー職をつとめていた。彼にはアブダッラー 'Abd Allāh [? -581/ ? -1185年] [⑪] という息子がいたが早世している。

以上は、ラスール朝初頭までのイムラーン家の概略である。

イムラーン家は、財力を有し、ジャナド、ジブラなどのあるイエメン南部高原・山岳地域のウラマーに影響力をもっていた。そしてラスール朝以前の諸王朝治下でカーディーを輩出し、ラスール朝初頭には大カーディー職に就任する人物を生み出していた。

II

647/1249年にマンスールが暗殺され、同年、その息子ムザッファル al-Muzaffar Yūsuf b. 'Umar〔在位647-694/1249-1295年〕がスルタンに即位した。ムザッファルはまずザビードで発生したマムルークの反乱を鎮圧し、ティハーマをその支配下においた。しかし、後にラスール朝の首都となるタイIZZ Ta'izz や、その南方の国際交易港アデンはいまだ掌握していなかった。アデンがラスール朝にとって重要であったことは言うまでもないが、タイIZZはそのアデンに距離的に近く、アデンとアラビア半島内陸部とを結ぶ主要幹線道上にあり、また高原に位置するため、北方のサイド派イマーム勢力の南進に備え得る軍事的⁽¹⁹⁾重要拠点でもあった。そのためタイIZZ及びその周辺の南部高原・山岳地域を掌握することは、ラスール朝のイエメン支配の安定と拡大とを求めるムザッファルにとって急務であった。

648/1250年、アデン遠征に着手したムザッファルは、その途上、イムラーン家のムハンマド Muḥammad b. As'ad b. Muḥammad b. Mūsā b. al-Ḥusayn b. As'ad al-'Imrānī〔618-694/1221-1294年〕〔⑫〕によって、フトバにおいてその名を読み上げられた。ムハンマドはかつてムハンマド〔⑩〕の代理で大カーディーをつとめたアスアド〔⑦〕の息子である。ジャナディーは、このムハンマドとムザッファルとの関係を、次のように記している。

親交が彼（ムハンマド）とムザッファルとの間に生じた。その親交は、マンスールの息子のうちムザッファルとその他の兄弟たちが分離した時にはじまった。ムザッファルは山岳地域（Jabal）に達した。彼（ムハンマド）の叔父は彼に「マスナアからムザッファルのためにフトバをしにゆくように」と命じた。そこで彼はジュバア Juba' にゆき、ムザッファルと会見し、最初の金曜日にムザッファルのためにフトバをした。この地が彼の為にフトバがなされた最初の地であった。そして二人の間には固い友情が生まれた。彼はムザッファルのために、al-Ayfu' やその周辺のアラブ、例えば、それら（アラブ）部族長のひとり⁽²⁰⁾が、'Ubayd b. 'Ayyāsh である Saba'yyūn⁽²¹⁾などの諸部族に忠誠を誓わせた。

Saba'yyūn なる部族民の詳細は分からないものの、その居住地がイッブ南方の

al-Ayfu' 周辺であったことは確認できる。⁽²²⁾ ムハンマドはこのような南部高原・山岳地域に居住する諸部族民を従わせ得る政治的影響力を持っていたと考えられる。これは彼の属するイムラーン家がこの南部高原・山岳地域の名家であり、カーディー職就任者を輩出した有力家系であったからであろう。イムラーン家がムザッファルの支配を認めたのは、すでにマンスールの治世に大カーディーを出していたことから、体制への接近がイムラーン家の政治的利益に結びつくと判断したからであろう。他方、ムザッファルは、兄弟とのスルタン位争奪抗争に勝利したとはいえ、各地の諸部族民に対する支配はいまだ脆弱であった。そのため南部高原・山岳地域に影響力をもつイムラーン家のフトバによって当該地域の支配者として認められることは、ムザッファルにとって重要な意味を持っていた。ジャナディーは、先の記事に続けて次のように述べている。

そしてその親交は確かなものとなり、それはワジールと大カーディーを彼（ムハンマド）にもたらした。これが大カーディー職とワジール職を（同時に）担った最初であった。⁽²³⁾

これらの任命時期は不明だが、648/1250年のムハンマドのフトバ以降であったことは間違いなさだろう。こうしてワジールと大カーディーを兼任するようになったムハンマドは、ムザッファルの治世が終わる694/1294年まで国家の要職を兼務し続けることになった。⁽²⁴⁾ そしてその結果、イムラーン家は、「カーディーとワジールの集団 (jamā'a) であるイムラーン家」⁽²⁵⁾ と言われるようになったのである。

ところでムハンマドは約40年間ワジールをつとめたにもかかわらず、その足跡を記す史料は少ない。最も多い記述はワジールとして彼が軍事活動に従事したもののだが、⁽²⁶⁾ これはムザッファルの治世が北方のザイド派イマーム勢力に対する防衛と王朝版図の拡大時期とに重なっていたからであろう。また軍事活動記事以外には、日常的に「スルタンのインクスタンドを持ち上げたり、ターバンを結んだりする」⁽²⁷⁾ といった近臣的な役割についての記事が残されている程度である。

ワジールをつとめたムハンマドは、一方で大カーディーとしてラスール朝司法界の頂点にあった。ラスール朝の司法行政機構はシャーフィイー派の大カー

ディーのみが置かれ、その下にカーディーおよびハーキム (ḥakim) が配置され⁽²⁸⁾ていた。このような機構においてカーディーの任免は大カーディーがスルタンから任された重要な職務であったが、ある法学者の死亡録には、例えば次のようにある。

イムラーン家 (Banū al-ʿImrān) は彼をアデンのカーディー職に任命した。⁽²⁹⁾
彼の祖父もアデンのカーディーであった。

このようにムザッファルの治世のカーディーが大カーディーではなく、イムラーン家によって任命されていたように史料には記されている。下表は、イムラーン家によるカーディーの任命をまとめたものである。

表：イムラーン家によるカーディーの任命

	名 前	任 地	修学地	典 拠
1	ʿAbd Allāh b. Abū Bakr al-Dathīnī	ʿAdan	Dhū Asraq	<i>al-ʿUqūd</i> , I/p. 226 <i>al-Sulūk</i> , I/p. 448
2	ʿAbd Allāh b. ʿAbd al-Raḥmān b. Zakariyāʾ	al-Kadrāʾ	al-Shuwayrāʾ	<i>al-ʿUqūd</i> , I/pp. 250-1 <i>al-Sulūk</i> , I/pp. 411-2
3	Abū al-ʿAtīq Abū Bakr b. ʿUmar b. Saʿd	?	?	<i>al-ʿUqūd</i> , I/p. 412
4	Abū ʿAbd Allāh Muḥammad b. al-Ḥimyarī	al-Tājīya	al-ʿAriba	<i>al-ʿUqūd</i> , I/pp. 435-6 <i>al-Sulūk</i> , II/pp. 99-100
5	Mūsā ?	Zabīd	Zabīd	<i>al-Sulūk</i> , I/p. 328
6	Abū Muḥammad al-Ḥasan al-Sharʿabī	Mawzaʿ	Taʿizz	<i>al-Sulūk</i> , II/p. 392
7	ʿAbd Allāh b. ʿAbd al-Wahhāb	al-Nāhiya	al-Dahābī	<i>al-Sulūk</i> , II/p. 254

のちにイムラーン家に代わって、第4代スルタン＝ムアッヤド時代にワジール職及び大カーディー職を独占したムハンマド・ブン・ウマル家 Banū Muḥammad b. ʿUmar もまたイムラーン家と同様に多数のカーディーの任命に関わっていたことから判断すると、上記記事および上表は、ムザッファル時代においては、大カーディーを通じてイムラーン家の意向がカーディーの任免に⁽³⁰⁾反映していたと考えられる。

また、カーディーに任命された者の修学地を検討してみると、イムラーン家の影響下にあった南部高原・山岳地域に関わりのある者（上表の1,2,4,6,7）を見出すことができる。当時修学機会を求めるウラマーがイムラーン家に集まっていたことや、イムラーン家がマドラサの建設や、教授職、イマームなどの任命などにも関与していたことを考慮すると、これは、イムラーン家がウラマーを育成し、同家と師弟関係をもつウラマーをカーディー職に任命する傾向にあったことをうかがわせる。この裏付けとして、例えば「イムラーン家が彼（上表3の人物）をカーディーに任命した。そしてこれ（カーディー職）はイムラーン家が没落するまで続いた。その後、ムハンマド・ブン・ウマル家は彼らが台頭するとすぐに彼を免職した⁽³¹⁾」とある。ムアッヤドの治世に台頭したムハンマド・ブン・ウマル家はイムラーン家によってカーディーに任じられた者を罷免していた。このような事例は上表の（2,4,6,7）のカーディーにも見られる。これは新勢力のムハンマド・ブン・ウマル家が旧勢力のイムラーン家と関わりを持つカーディーを嫌った結果であった。

イムラーン家は自身の影響下にあるウラマーを育成・登用する一方で、その意向に従わないウラマーに対しては不当な対応をしていた。例えばある法学者に対しては、「イムラーン家は彼を嫌っていた。なぜなら彼は彼らに従わなかった」として、その法学者が売却した土地の収益の一部をイムラーン家に納めるよう強要し、それが拒絶されるとスルタンに訴えるといったありきまでであった⁽³³⁾。

ところで司法行政分野におけるイムラーン家の影響力がたかまることによって、次第に同家による不正が生じるようになった。

カーディー職による Abū al-Khaṭṭāb ‘Umar の収入 (rizq) とその地方のハーキムの収入はジズヤ (jizya) からでていた。そしてこのことは彼が死亡するまで続いた。(中略) スルタン＝ムザッファルは彼を鄭重に扱ったため、al-Qāḍi Bahā’ (ムハンマド [12]) は彼からリベート (isqāt) をとることができなかった。そしてユダヤ教徒のジズヤと給与 (jāmakiya) は彼が死ぬまでありつづけた。⁽³⁴⁾

この記事はサナア Ṣan‘ā’ のカーディーに関する事例であり、その給与はユダ

ヤ教徒のジズヤから捻出されていたとある。例えば同時期のジャナドのカーディーであった al-Qāḍī ʿĪsā b. ʿAlī b. Muḥammad b. Abū Bakr b. Mufallit の給与についても「彼の給与 (jāmakīya) は、ジャナドにいるユダヤ教徒のジズヤからであり、それは15ディーナールであった⁽³⁵⁾」とあることから、各地域のカーディーの給与もそこに居住するユダヤ教徒のジズヤから捻出されていたと考えられる。上記ではカーディー＝イーサーがスルタンに近かったため、ムハンマドはリベートをとれなかったとしているが、これは裏を返せば、イムラーン家の大カーディーがカーディーの給与からある程度のリベートを徴収していたことの証左であろう。

イムラーン家の司法行政分野における影響力の増大と、それに起因するこのような不正は、その結果として次のような現象をもたらした。

ムザッファル王朝の名士たち (aʿyān) について言えば、それはカーディーとワジールの集団 (jamāʿa) であるイムラーン家であった。彼らの第一は Muḥammad b. al-Qāḍī Abū Bakr であり、彼の父に関しては (アイユーブ朝の) al-Masʿūd 時代においてすでに述べた。また彼の甥は al-Bahā なるラカブをもつ Muḥammad b. Asʿad であった。彼 (Muḥammad b. Abū Bakr) は大カーディーとワジールになった。諸地方の法学者たちはこのことによって彼を大いに嫌悪した。そして彼ら曰く、このワジールによる裁判の乱れ (ikhtilāf) が知られるようになり、このことがイエメンにおける裁判に関わる全ての者にとって、ひとつの型 (uslūb)⁽³⁶⁾ となった。

ワジール及び大カーディーを兼任したムハンマドによってもたらされた裁判の混乱が如何なるものか具体的には分からないが、いずれにせよそのような乱れがカーディーや裁判に関わるその他の者にも伝わり、それが裁判の型のひとつとなってしまったのである。

このようにムザッファル政権下において、イムラーン家は中央にその家系の者を送り込み、主として司法行政分野でその勢力を伸ばした。しかし、その一方で中央官職における特権的な位置を占めたイムラーン家はラスール朝司法界に不正と混乱を生じせしめるようになったのである。

III

自身の死期を悟ったムザッファルはその長子アシュラフ al-Ashraf ‘Umar b. Yūsuf [在位694-696/1294-1295年] を次期スルタンに指名した。それと同時に、ムザッファルのワジール兼大カーディーであったムハンマド〔⑫〕は、イムラーン家の権勢維持のために兄弟のハッサーン Ḥassān[d. 708/1308年]〔⑬〕をアシュラフのワジールに推薦し、自らは大カーディーにとどまることでムザッファルの承諾を得た。⁽³⁷⁾これによってムハンマドは、ラスール朝王家とイムラーン家との密接な関係の継続とイムラーン家の更なる繁栄の確約とを獲得しようとい図っていた。

ところが696年ムハッラム月23日/1296年11月21日、アシュラフが治世2年目にして急死し、アシュラフへの謀反罪で幽閉されていたムアッヤド al-Mu‘ayyad Dā‘ūd b. Yūsuf [在位696-721/1296-1322年] が第4代スルタンに即位した。ハッサーンはムアッヤド即位直後に謁見を求め、忠誠を誓ったが、スルタン位を巡る抗争時にアシュラフ側についていたためワジール職を解任され、またほぼ同時に大カーディー職をも失った。⁽³⁸⁾こうしてアシュラフの急死によってその後ろ楯をなくしたイムラーン家は、中央における勢力を急速に失っていった。

イムラーン家失脚のもうひとつの原因は、これまで度々言及してきたムハンマド・ブン・ウマル家 Banū Muḥammad b. ‘Umar なるウラマー名家の台頭にあった。ムハンマド・ブン・ウマル家に繋がる人物はスライフ朝 Ṣulayhids[439-532/1047-1138年]時代に高名なウラマーとしてすでに知られていた。⁽³⁹⁾ラスール朝時代になるとスルタン位を巡るアシュラフとムアッヤドとの抗争でムアッヤド側につき、その危急をたびたび救ったことが同家台頭の契機となった。そしてその当時の家長の al-Ṣāḥib Muwaffaq al-Dīn ‘Alī b. Muḥammad b. al-Yaḥyawī が696/1296年にワジール兼大カーディーに就任したことによって、かつてのイムラーン家のように、ムハンマド・ブン・ウマル家はその勢力を伸張するようになった。⁽⁴⁰⁾

こうして失脚したイムラーン家のその後に関しては次のようにある。

ムアッヤドはイムラーン家全員にサフファナ村 qarya al-sahfana に移り住むよう尊敬と厚意をもって命じた。すると、ムアッヤドのもとにスルタ

ンの甥の al-Nāṣir Muḥammad b. al-Ashraf から次のような情報がもたらされた。すなわちそれは al-Qāḍī Ḥassān の奴隷の一人が ‘Awmān に赴き、かつて al-Qāḍī Bahā’ al-Dīn Muḥammad b. As’ad al-‘Imrānī〔19〕の下にいたある女奴隷と会った。そして、奴隷は彼女に「al-Qāḍī Ḥassān の持っていた毒入り首長水差 (qarīrat samm) (の水) をムアッヤドに飲ませよう al-Qāḍī Ḥassān が命じた」と言ったのであった。まさに al-Qāḍī Ḥassān と彼の一族の目的 (garad) はラスール家を滅ぼすこと (hullak) であった。それゆえ彼ら及び彼らの家族に対するムアッヤドの怒りは激しく、彼らにその財産とワクフの収入を孤児の為に用いるよう命じた。しかし彼ら (イムラーン家) はそれに何一つ応じなかった。そこでムアッヤドは彼らをアデンへ (連行し)、Dār al-Wilāya の門の並びに、彼らが入る監獄を建設するように命じた。⁽⁴¹⁾

サフファナ村は、ジャナドの北方の村落でイムラーン家の動向を首都タイIZZから監視できる範囲に位置していた。⁽⁴²⁾ そのため彼らの移住先として設定されたと思われる。この移住命令の理由は、ジャナディーによればジャナドのマスジドにおけるイムラーン家とムハンマド・ブン・ウマル家の衝突を後者がスルタンに訴えたことによるとしているが、より現実的には、イムラーン家の動静を常に監視下に置いたための、ラスール朝当局の方策であったと考えられる。ところが、イムラーン家はその移住命令に従わず、ムアッヤドの毒殺とラスール王家根絶を謀った。しかしその謀叛は失敗に終わり、アデンに投獄されることとなった。ジャナディーには、「ムアッヤドはマスナアからタイIZZに女、子供を含めた彼ら (イムラーン家) 全ての出頭を命じた。そして彼らの家を封鎖した⁽⁴⁴⁾ (khatama)。」とあり、マスナアがイムラーン家の手を離れ、当局の下におかれることになったことが分かる。その後、この反逆事件の首謀者であり、イムラーン家の家長的存在であったハッサーンは708/1308年に獄死した。⁽⁴⁵⁾

アデン収監後、ムアッヤドの妻 al-Dār al-Karīma Bint Asad al-Dīn がイムラーン家を弁護し、「彼らを私の客分 (diyāfa) として扱え」と命じたことによって一時的に監獄から開放されたものの、アデンの城壁外に出ることは依然として禁じられていた。⁽⁴⁶⁾ イムラーン家が他地域への移動を許可されるのは「ワジール (Muwaffaq al-Dīn ‘Alī b. Aḥmad al-Yaḥyawī) の死亡およびムハンマド・

ブン・ウマル家の日々の終焉以後」のことであった。このワジールの死亡年が712/1312年なので、それ以後にアデンから解放されたと考えられる。しかしムアッヤドは反逆の首謀者ハッサンの息子ムハンマド〔14〕をザビードにあったイムラーン家の館に居住させた。⁽⁴⁷⁾この館を建設したのはムザッファルの治世にイムラーン家の繁栄を導いたムハンマド〔12〕であった。かつてイムラーン家の栄華を築き上げた人物の館がその子孫の軟禁の場となったのである。

ムアッヤド時代以降のイムラーン家の消息を伝える記録としては、第5代スルタン＝ムジャーヒド al-Mujāhid ‘Alī b. Dā’ūd [在位721-764/1322-1363年]によるイムラーン家のサファナ移住命令が伝えられているが、この記事を最後に、ラスール朝初期に隆盛したイムラーン家の記事はなくなる。

おわりに

イムラーン家はスルタン＝ムザッファルとの密接な関係によって中央に台頭したウラマー名家であった。同家は主として司法行政分野にその権勢を誇り、ラスール朝司法界に大きな影響を与えた。しかしイムラーン家隆盛の要因が第2代スルタン＝ムザッファルとの結びつきによるところが大きかったため、その代替わりによって、同家の権勢は失墜した。そしてこれは、本稿で若干触れたムハンマド・ブン・ウマル家と第4代スルタン＝ムアッヤドとの場合もまた同様であった。

その後、第5代スルタン＝ムジャーヒドの治世において、ラスール朝の官僚機構がエジプト・マムルーク朝のその影響を受けて整備されると、イムラーン家のような特定のウラマー名家の台頭はみられなくなる。これは換言すれば、このような名家の台頭の背景には、ラスール朝初期のいまだ脆弱な官僚機構⁽⁴⁹⁾の存在があったと考えられる。ラスール朝初期のスルタンたちは、イエメンにその支配を浸透・確立させるため、在地に強い影響力を有したウラマー名家に依存せざるを得なかったのである。

イムラーン家系図

注

- (1) 家島氏のラスール朝に関する一連の研究は、家島彦一『海が創る文明 インド洋海域世界の歴史』, 朝日新聞社, 1993年及び同書の引用文献一覧を参照のこと。
- (2) G. R. Smith, *The Ayyubids and Rasulids: the transfer of power in 7th/13century Yemen*, *Islamic Culture*, vol. 43, 1969, pp. 175-88. D. M. Varisco, *Text and Pretext: The unity of the Rasulid state under al-Malik al-Muẓaffar*, *Revue du Monde Muslman et de la Méditerranée*, vol. 67, 1993, pp. 13-23.
- (3) 拙稿「ザビード～南アラビアの学術都市」『オリエント』37巻－2号, 1994年, 53-74頁。
- (4) *Ṭabaqāt al-Khawāṣṣ*, p. 26.
- (5) *al-Sulūk*, I /pp. 467-8.
- (6) *al-Sulūk*, I /p. 467.
- (7) ラスール朝時代のザビードについては, 前掲拙稿参照。
- (8) またマスナア以外にはアッカイル al-'Aqqayr という村落がある。これはジャナド近郊にあり, ラスール朝第4代スルタン＝ムアッヤド時代に隆盛したウラマー名家のムハンマド・ブン・ウマル家の居住地であった。*al-Sulūk*, I/p. 276.
- (9) *Ṭabaqāt al-Fuqahā'*, p. 174; *Ṭabaqāt al-Khawāṣṣ*, pp. 363-5; *Ṭabaqāt al-Shāfi'i*, I / pp. 336-338. なお人名の後の番号は本文末のイムラーン家系図の番号に対応している。以下同様。

- (10) *Qilādāt*, fol. 51a; *Ṭabaqāt al-Fuqahā'*, p. 189.
- (11) *Qilādāt*, fol. 36a; *Ṭabaqāt al-Fuqahā'*, p. 185.
- (12) *al-Sulūk*, I / pp. 337-8; *Qilādāt*, fol. 50b; *Ṭabaqāt al-Fuqahā'*, p. 188; *Ṭabaqāt al-Shaḥīṭī*, I / pp. 115-118.
- (13) アイユーブ朝のイェメン侵攻に関する研究は, M. L. Bate, *Yemen and Its Conquest by The Ayyubids of Egypt (A. D. 1137-1202)*, Chicago, Ph. D. thesis, 1975 が最も詳しいが, 近年, サイド派関連の新史料の発掘により, 再検討すべき箇所は少なくない。
- (14) *al-Sulūk*, I / p. 377; *Ṭabaqāt al-Fuqahā'*, p. 235; *Thaḡhr 'Adan*, II / p. 220.
- (15) *al-Sulūk*, I / p. 352; *Ṭabaqāt al-Fuqahā'*, p. 186.
- (16) *al-Sulūk*, I / pp. 424-425.
- (17) *al-Sulūk*, I / p. 425.
- (18) *Qilādāt*, fol. 51b; *Ṭabaqāt al-Fuqahā'*, p. 186.
- (19) 前掲拙稿62頁参照。
- (20) この人物は 'Ubayd b. 'Ayyāsh b. 'Amr b. 'Anas b. Sālim al-Suyūfī al-Kindī と *Turfat*, p. 133 にその名のみ記載されている。
- (21) *al-'Asjīd*, p. 215; *al-Sulūk*, I / pp. 425-6; *Thaḡhr 'Adan*, p. 203; *al-'Uqūd*, I / p. 94. なお, *al-'Uqūd* では「そこ (Juba) は, 山岳地域 al-Jabal のなかで, 彼 (ムザッファル) のためにフトバをした最初の地である」と記されている。
- (22) al-Ḥajrī によれば, al-Ayḡū' はイッブ南方のウダイン al-'Udayn にある広大な地域であるという。Muḥammad b. Ahmad al-Ḥajrī, *Majmū' buldan al-Yaman wa-qabā'il-hā*, ed. Ismā'īl al-Akwa', 4 vols., Ṣan'ā', 1984, vol. 1, p. 99.
- (23) *al-Sulūk*, I / p. 426; *al-'Uqūd*, I / p. 292.
- (24) *al-'Uqūd*, I / p. 292 によれば「彼 (ムハンマド) はムザッファル時代において初めてワジール職と大カーディー職をつとめた人物であり, 彼の次にムアッヤド時代において al-Qādī Muwaffaq al-Dīn 'Alī b. Muḥammad al-Yaḥyawī が, そしてムジャーヒド時代において al-Qādī Muwaffaq al-Dīn 'Abd Allāh b. 'Alī, Muḥammad al-Yaḥyawī が, そしてアシュラフ時代においては al-Qādī Wajīh al-Dīn 'Abd al-Raḥman b. 'Alī b. 'Abbās が(ワジール職と大カーディー職をつとめた)」とあるように, このようなワジール職・大カーディー職の兼任は以後しばしば見られる現象となった。
- (25) *al-Sulūk*, II / p. 565.
- (26) *al-'Asjīd*, p. 263; *al-Simt*, pp. 452, 495, 535 など。
- (27) *Bahjat*, p. 183; *al-'Uqūd*, I / p. 303. また *al-Sulūk*, II / p. 85 にはスルタンの参墓に同行する記事が見える。
- (28) ラスール朝時代の大カーディー就任者は以下のとおり。
- 1: Ismā'īl b. Muḥammad al-Ḥaḍramī ((d. 675) シャーフィイー派
 - 2: Muḥammad b. As'ad al-'Imrānī (d. 695) シャーフィイー派

- 3: 'Alī b. Aḥmad b. Muḥammad al-Yaḥyawī (d. 712) シャーフィイー派
- 4: Abū Bakr b. Muḥammad b. Aḥmad b. 'Umar b. al-Adīb (d. 725) シャーフィイー派
- 5: 'Abd Allāh b. 'Alī Muḥammad al-Yaḥyawī (d. 737) シャーフィイー派
- 6: 'Alī b. Aḥmad b. 'Alī al-Junayd (d. 753)
- 7: 'Abd al-Akbar b. Aḥmad al-Junayd (d. 754)
- 8: Muḥammad b. Aḥmad b. Ṣaqqar al-Dimashqī (d. 785)
- 9: Muḥammad b. 'Abd Allāh al-Rīmī (d. 792)
- 10: Muḥammad b. Ya'qūb al-Firūzābādī (d. 817) シャーフィイー派
- 11: Aḥmad b. Abū Bakr al-Raddād (d. 821)
- ※ 8 はシリアからイエメンにきた初の外国人大カーディー。また10は著名なアラビア語辞典 *al-Qāmus al-Muḥīṭ* の著者。また、大カーディー職がシャーフィイー派のみであったと考えるのは、上表のように就任者の半数がシャーフィイー派であったことに加えて、ラスール朝創設時にはハナフィー派であった初代スルタンニマンスールが夢で預言者ムハンマドの勧めによってシャーフィイー派に法学派を変えたということによる (*al-'Uqūd*, I / pp. 87-88)。
- (29) *al-Sulūk*, I / p. 448; *al-'Uqūd*, I / p. 226.
- (30) 史料には、イムラーン家と同様にムハンマド・ブン・ウマル家がカーディーを任命したとする記事が多数みえ、それらは例えば、*al-Sulūk*, II / pp. 61, 115, 129, 189, 202, 221, 256, 417, 449; *al-'Uqūd*, I / pp. 323, 439, などである。
- (31) マドラサ建設に関しては, Ismā'il b. 'Alī al-Akwa', *al-Madāris al-Islāmiya fi al-Yaman*, Ṣan'ā', 1980, p. 145, そのほか教授やイマームの任命については, *al-Sulūk*, I / p. 452, II / pp. 78, 119, 144, 180; *al-'Uqūd*, I / p. 374 など。
- (32) *al-'Uqūd*, I / p. 412.
- (33) *al-Sulūk*, I / p. 451; *al-'Uqūd*, I / pp. 260-261.
- (34) *al-Sulūk*, I / p. 446.
- (35) *al-Sulūk*, I / p. 449, II / p. 173; *al-'Uqūd*, I / p. 189.
- (36) *al-Sulūk*, II / p. 565.
- (37) *al-Sulūk*, I / p. 426; *Taghr 'Adan*, II / pp. 203-4. なおムハンマドは695/1298年に死亡し、それによってハッサーンが大カーディー職を兼任するようになった。
- (38) *al-'Asjīd*, p. 281; *al-'Uqūd*, I / p. 299.
- (39) *al-Sulūk*, I / pp. 276-7.
- (40) *Bahjat*, p. 183; *Qurrat*, p. 342; *al-'Uqūd*, I / p. 303.
- (41) *al-'Asjīd*, p. 284; *Taghr 'Adan*, II / pp. 48-49; *al-'Uqūd*, I / pp. 303-304. なお, Abū Makhrāmā はこの記事を *al-Khazraji* が *Bahjat* から引用したものをさらに引用したとしているが, *Bahjat* には当該箇所は見当たらない。
- (42) *Ṭabaqāt al-Khawāṣṣ*, p. 22.

- (43) *al-Sulūk*, I / pp. 426-7, II / p. 574.
- (44) *al-Sulūk*, I / p. 429.
- (45) *Taghr 'Adan*, II / pp. 48-49.
- (46) *al-Sulūk*, I / p. 429; *Taghr 'Adan*, II / p. 49.
- (47) ムハンマド・ブン・ウマル家は、716/1316年にはムアッヤドの治世転覆を謀って失敗し、また719/1319年にもスルタンの不興を買っており、この結果、同家は失脚することになる。*Bahjat*, p. 280, pp. 282-283.
- (48) *al-Sulūk*, I / p. 429; *Taghr 'Adan*, II / p. 49.
- (49) *Ṣubḥ*, V / pp. 34-5. なお、al-Qalqashandī の記述しているイエメン関連記事が al-Mujāhid 時代の状況を伝えたものであることは、家島氏によってすでに指摘されている。家島彦一「イエメン・ラスール朝史に関する新写本」『アジア・アフリカ言語文化研究』第7号、1974年、166頁、註2。

引用史料とその略称

- al-'Asjid*: al-Khazraji, *al-'Asjid al-Masbūq fī man Walīya al-Yaman min al-Mulūk*, Publication Project 1/2. Y. A. R. : Ministry of Information and Culture, Ṣan'ā', 1981.
- Bahjat*: Tāj al-Dīn 'Abd al-Bāqī b. 'Abd al-Mujīd al-Yamanī, *Bahjat al-Zaman fī Ta'rikh al-Yaman*, ed. 'Abd Allāh Muḥammad al-Ḥibshī, Ṣan'ā', 1988.
- Qilādāt*: Abū Makhrama, *Qilādāt al-Nahr fī Wafayāt A'yān al-Dahr*, Leiden Library, ms, or. 2598.
- Qurraṭ*: Ibn al-Daybā', *Kitāb Qurraṭ al-'Uyūn fī Akhbār al-Yaman al-Maymūn*, ed. Muḥammad b. 'Alī al-Akwa', Bayrut, 1988.
- al-Simt*: Badr al-Dīn Muḥammad b. Ḥātim, *Kitāb al-Simt al-Ghālī al-Thamīn fī Akhbār al-Mulūk min al-Ghuzz bi-l-Yaman*, ed. G. R. Smith, GMS, 2 vols., London, 1974.
- Ṣubḥ*: al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-A'shā*, 14 vols., Cairo, 1919-22.
- al-Sulūk*: al-Janādī, *Kitāb al-Sulūk fī Ṭabaqāt al-'Ulamā wa al-Mulūk*, ed. Muḥammad b. 'Alī b. al-Akwa', 2 vols., Ṣan'ā', 1993.
- Ṭabaqāt al-Fuqahā'*: Ibn Samura, *Ṭabaqāt al-Fuqahā' al-Yaman*, ed. Fa'ūd Sayyid, Cairo, 1957.
- Ṭabaqāt al-Khawāṣṣ*: al-Sharjī, *Ṭabaqāt al-Khawāṣṣ Ahl al-Ṣidq wa al-Akhlaṣ*, Beirut, 1986.
- Ṭabaqāt al-Shāfi'īya*: al-Subkī, *Ṭabaqāt al-Shāfi'īya al-Kubrā*, ed. Maḥmūd. Muḥammad al-Ṭahāḥī & Muḥammad al-Ḥulw, 8 vols., al-Qāhira, 1964-76.
- Thaghr 'Adan*: Abū Makhrama, *Ta'rikh Thaghr 'Adan*, ed. O. Löfgren, 2 vols, Uppsala, 1950.

Ṭurfat: al-Ashraf ‘Umar b. Yūsuf, *Ṭurfat al-Aṣḥāb fī Mā rifat al-Ansāb*, ed. K. V. Zettersteen, Damascus, 1949.

al-‘Uqūd: al-Khazrajī, *al-‘Uqūd al-Lu’lu’wīya fī Ta’rīkh al-Dawlat al-Rasūliya*, ed. Muḥammad ‘Asal, GMS, 2 vols., Leiden-London, 1906-1908.

※本稿は、平成十年度文部省科学研究費（特別研究員奨励費）の交付を受けた研究成果の一部である。